

昭和48年 9 月 20 日 初版発行

昭和50年11月20日 4版発行

© 1973 S. Yamamoto. Printed in Japan.

逃げろツチノコ

《検印廃止》

著 者 山 本 素 石

印 刷 株式会社堀内印刷所

製 本 株式会社徳住製本所

振替口座東京2639番
電話東京263局0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2

発 行 株式 二 見 書 房
会 社

0095-730834-7339



逃げろツチノコ

山本素石 著



二見書房



わたしのツチノコ

田 辺 聖 子

もう七、八年も昔になろうか、息子の見ていた少年マンガ週刊誌のよみもの記事で、ツチノコの話を読んだ。尤も、その中にはツチノコだけでなく、ムー大陸の話とか、南米アマゾン川の大怪魚とか、イースター島の巨石群とか、雪男、ネッシー、円盤などについても毎号、のっていたのである。

私はそんな話が大好きで、むさぼるように読み、うっとり空想する時間が、また大好きだった。

新聞連載小説の「すべてころんで」を書くとき、私はどれかを使いたくて、その中で一ばん手近にあって探險しやすいツチノコをとりあげた。ムー大陸や雪男も魅力的であるが、何しろ女の身として、取材がたいへんである。

そうしてツチノコを十数年さがしてられる山本素石氏を紹介していただいたのだが、いっぺんに私は、ツチノコファンになってしまった。

山本さんのお話をきいていると、ツチノコは、そのへんの山中のいたる所にトグロを巻いてるような気がしてきた。グロテスクであり、どうもうではあるが、めったに人の目にふれぬところで、ひっそりと生きている、神秘で魅惑的な魔性の神蛇なのである。しかも、たいへんリアルなのである。

私はすこし子供っけのぬけぬ、バカな所があるせいかな、山本さんのお話をきいてるうちに、冒険心をあおられて、文字通り、血湧き肉おどる、という感じがしてきたのである。

山本さんは、それまでの研究をのこりなく私に教示して下さいました。これもありがたいことで、山本さんは一向に家元風なモノモノしさがなく、知ってることは何でも教えてあげますわ、と気軽に、いろんな情報を伝えていただき、おかげで、私は大よろこびで楽しみながら小説の中に、ツチノコを紹介した。

それにもう一つの魅力は、ツチノコを追う人々のありさまだった。山本

さんと、そのグループのノータリクラブの人々を、はじめはお目にかからなくて、こうもあろうかと想像しつつ小説に書いたが、実際にお目にかかってみて、想像通りだったのが、ことにも、おかしかった。

みんな飄々として、それでいて、ツチノコに熱い夢を賭け、ツチノコを追いかめ、日常次元からひょいと離れたロマンの世界へ、自由自在に飛翔する。マトモな生活をして人生の重荷を負うて生きる、中年の男性が、こんな夢に憑かれているのが、たいへん、可愛いらしく、私には魅力的なのである。

しかし、山本さんたちの意図と別なところで、今やツチノコは、世上にあまりにもポピュラーな存在になってしまった。

ことにも、商業ベースにのせられ、俗悪な資本主義のオモチャになってしまったツチノコを、私は悲しむ。

幻のツチノコは、ふかいふかい山の中で跳梁して、人間の手のとどかないところにいればこそ、心そえられるものなのに。

おれはツチノコまぼろしのへび

「おれの棲みかは深い山

草ぼうぼうの荒れ野原

風より早く すっとん

はねたりとんだり泳いだり

輪のように丸くころんだり

くねって かくれて とびかかる

自由気ままに生きるんだ

人間なんかにやつかまるもんか

ああかわいそう

ダメな人間ちゃん

ヨホホーイ ヨホホーイ」

（「すべってころんで」より）

目次

私のツチノコ……田辺聖子 2

怪蛇現わる 12

幻のツチノコ 19

探検志願者 26

ノータリンクラブ誕生 35

丹波のスキノトコ 42

ゴハッスン登場	49
飯道山 はんどう のゴハッスン	55
指名手配書	61
方言（俗称）の妙味	68
ころがる話	74
三振記録	81
夜泣峠 かやば の萱場	89
ツチノコがとれた話	96
ツチノコを捕った話	105
越美山地 あづみ のコロ	111

最初の新聞記事と元鉷山師の話

117

林谷の探検

124

離婚騒動

133

河内騒動の発端

141

迷信家と大学生

149

囧おとりと硫黄と

157

茶番劇

166

ツチノコ・ミステリー

174

孤影・岩魚山人

184

ツチンコをひろった娘

193

こぼれ話拾遺 200

『すべてころんで』 210

戦友往来 220

徳山村のツチノコ 231

三人の観察者 240

修験者とツチノコ 251

ツチノコ考現学 258

ツチノコ詐欺師現わる 267

あとがき 281

装
画

笠
木

実

逃げろツチノコ

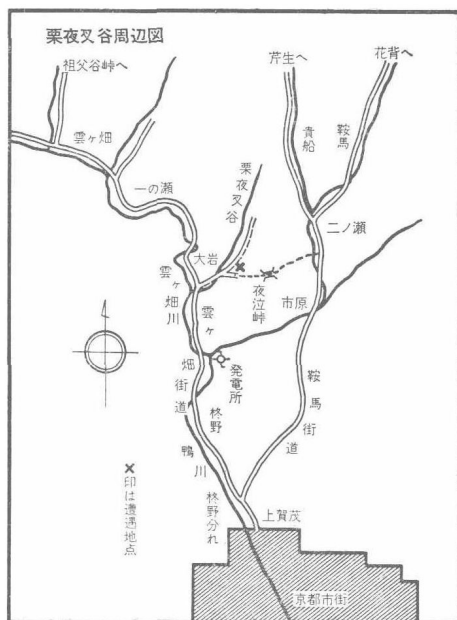
怪蛇現わる

蛇（へび）——ながすぎる。ヘルナールの『博物誌』より

人間に好かれる動物、嫌われる動物はいろいろあるが、爬虫類は総じて嫌われる方の仲間だろう。その代表格がへびである。中には「へび」と聞いただけで、眉をしかめて身ぶるいする人もいる。それほど嫌われるのは、つまり「ながすぎる」からである。くねくねと長細いわりにずっしりと重くて、変に冷たくて、そしてすべすべとからみつくあの感触は、受け取りようによってはゾッとする。いや、感触どころか、姿を見るだけでも悪感おかんがするという人が多い。「長物」とか「長虫」とかいって嫌われるのは、やはり必要以上？ に長いからであろう。

それとは逆に、もしいへん短いへびがいるとしたらどうであろうか。へびは、必ず長くなければいけないというきまりはどこにもないのである。世の中には、科学の常識に合わぬ、信じら

れないようなことがあるものだが、私がこれから語ろうとすることもそのひとつで、見た者以外は信じられぬほど太くて短いヘビとの遭遇と、その後十余年にわたる追跡探検のドキュメントである。



昭和三十四年八月十三日、京都の北山一帯は稀有の集中豪雨に見舞われた。そのときの雨量は、八・一三水害として、気象台の記録に残るほどの局地豪雨であった。それから十日ほどたって、水害で荒れた加茂川上流の様子を見たくなり、一人で雲ヶ畑の奥まで行ったのだが、源流地帯まで荒れ果てて、アブラハヤの姿さえ見られなくなっていた。水害のあった前日から、アマゴ釣りのために加茂川の奥へ入っていた私は、その日、恐ろしい山津波に出遭って、九死に一生を得た。想像を絶する杉林の山くずれ、そして忽然と

現出した天然ダム、それがみるみる決潰^{けつかい}して、山峽をゆるがす泥流となり、たった一日で加茂川源流の地形を変えてしまった。身の毛もよだつ自然の暴威をまのあたりに見た私は、ようやく落ちついた頃の災禍の跡を見届けたかったのである。

山をくだったのは昼前だが、数の少ない定期バスが出てしまった後だったので、加茂川沿いの雲ヶ畑街道を歩いてくだった。

雲ヶ畑と上賀茂^{かみか}の中ほど辺りに、大岩というところがあって、沿道随一の巨大な岩が頭上を圧するように覆いかぶさっている。その辺まで来た頃、かねて催していた便意が、思い出したように高まってきた。一帯は川と道とがぐんと近くなっていて、用を足すには気がひけるほど見通しのよい晴れがましいところなので、少しくだった道寄りに流れ込んでいる栗夜叉^{りしや}という小谷へ入ることにした。

そこは杉林のやせ尾根を挟んで流れくだる小さな支流で、めったに人の来るところではない。奥は草深い夜泣峠^{よなきとう}を越えて、鞍馬街道の二ノ瀬へ通じる古道だが、山仕事の人か物好きなハイカーの他は、歩いて通る人もなくなったもの淋しい山道である。

私は荷物を大岩近くの川原へ放りだしておいて、身軽になってその山道をのぼって行った。豪雨禍の痕^{あと}はここにもあって、青草をつけたままの土塊が林道のところどころを塞ぎ、淵らしい淵は土砂をため込んで浅くなっていた。けだるい谷川のせせらぎと、伸びきった雑草のむれるよう

